



Title	「言語とアイデンティティ」：当事者の視点から
Author(s)	北原, モコットウナシ; 富田, 望; オーリ, リチャ 他
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2024, 20, p. 28-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102043">https://hdl.handle.net/11094/102043</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《招待論文》

「言語とアイデンティティ」

— 当事者の視点から —

北原 モコットゥナシ (北海道大学アイヌ・先住民研究センター) ・富田 望 (ハーバード大学) ・  
オーリ リチャ (千葉大学) ・福島 青史 (早稲田大学)

**Exploring Language and Identity:**

**From the Perspectives of Impacted Individuals**

Mokottunas Kitahara, Nozomi Tomita, Richa Ohri, Seiji Fukushima

要 旨

バイリンガルろう教育が持つ問題は、ろう者のみならず、マイノリティに共通する課題を有する。「言語とアイデンティティ」の関係もその一つであり、マイノリティは、マジョリティによって、「アイヌ/日本」という民族性、「ろう者/聴者」という身体能力、「外国人/日本人」という有/無徴性により、分断され同定される。言語は両者の差異を特徴づけるものとしてあり、アイデンティティの大きな要素となる。しかし、この差異は、マジョリティ/マイノリティの力の不均衡を内在しており、差別や不公正につながっている。マジョリティより差別化されたアイデンティティがスティグマされる可能性もある。この状況は、知ること、関わること、言語的に新しい価値を導出することによって是正されうる。その意味で、言語教育は、公正に関わることができる。

Abstract

The connection between 'Language and Identity' is a pertinent issue that is not limited to the Deaf community but can be generalized to other minorities like the Ainu and foreigners living in Japan. In the cases described in the panel discussion, people from the Deaf community, the Ainu, and foreigners living in Japan are often marginalized by the majority Japanese. For the Ainu people, the difference in ethnicity (Ainu/Japanese) is prominent; for the Deaf, differences in physical ability (deaf/hearing), whereas marked/unmarked status regarding nationality (foreigner/Japanese) may play a role in creating boundaries between the mainstream majority and the marginalized minority. Language becomes a significant element of identity, highlighting differences between these groups. However, these distinctions often reflect power disparities between the majority and minority, leading to discrimination and injustice. Moreover, identities divergent from the mainstream can be stigmatized, further exacerbating inequalities. Addressing this situation requires knowledge, involvement, and the creation of new values. By fostering a deeper understanding of linguistic diversity and challenging discriminatory norms, language education emerges as a potent tool in advancing social equity and justice.

## 1. はじめに (福島青史)

本稿は、母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 学会 2023 年度研究大会で実施されたパネルディスカッションの内容を伝えるものである。2023 年度の研究大会のテーマは「公正な言語教育を求めて—バイリンガルろう教育を再考する—」であり、バイリンガルろう教育が大きなテーマであった。ただ、同テーマが持つ課題は多様かつ広範であり、ろう者に関わる問題だけではなく、その他の研究分野と多くの課題を共有している。パネルディスカッションは、その普遍性を探る試みとして企画され、異なる研究領域、当事者的な観点から研究をしている 3 名の研究者をパネリストとした。テーマを「言語とアイデンティティ」とし、北原氏はアイヌ、富田氏はろう、オーリ氏は差異の政治学という観点から、言語とアイデンティティの関係が検討された。

なお、本稿は、発表概要 (2~4 章) と「はじめに」「まとめ」の 6 章構成となる。発表概要はパネリスト自身が執筆し、「はじめに」「まとめ」はパネルディスカッションで司会を担当した福島が執筆した。本稿の全体的な編集は福島が担当したが、内容や形式の統一は意図しなかった。それぞれの筆者のスタイルの異なりは、そのままパネルディスカッションの意外性や動態性を伝えるものである。その結果、本稿は、スタイルの一貫性もなく、それぞれの章が明確に収斂する理路も曖昧で、ある意味、不完全な論文であるかもしれない。しかし、この多声的な構成は、パネリストの他者性を隠さず、論争的で触発的である。これらの声が訴える不公正をどのように受け止め、どのように行動するか。不足の部分は、読者に想起された記憶、思考、感情などで補ってほしい。パネルディスカッションのまとめとしての本稿の意図はそこにある。

## 2. 言語とアイデンティティ—当事者の視点から— (北原 モコットウナシ)

### 2.1 危機言語としてのアイヌ語

アイヌ民族は日本国の民族的マイノリティの一つであり、2019 年に制定されたアイヌ施策推進法にも明記された先住民族である。アイヌ語の現状は、ユネスコが定める指標に即して考察すると、9 項目のほぼすべてにおいて、極めて低いポイントしか付けられない。

#### 2.1.1 近代以前のアイヌ民族の居住地

アイヌ民族の居住地や居住環境は、近代以後に国家に統合される前後で大きな変化を遂げた。近代以前においては、サハリン島の南半分から北海道、千島列島にかけて、トウングース系の諸民族、ニヴフ民族、中国の歴代国家やロシア、カムチャツカ半島の諸民族、そしてアイヌ語でいうシサム (和民族、狭義の日本人) と接触しながら生活していた。

#### 2.1.2 和民族による支配と言語への圧迫

アイヌ語の使用や和民族との交易は、国内で文献資料が編まれ始めた古代よりも前に遡る。江戸時代に入ると、アイヌ民族との交易権を独占した松前氏が徐々に武力による支配と収奪を開始し、近代に入ると新政府は北海道を定住型植民地化にしていた。これにより、言語や生業の転換が強要され、また差別が放置される状況が今日まで継続されている。この中で、アイヌ語をはじめとする民族性の

表出は、被差別リスクを伴うものとなり、アイヌ民族のうちにトラウマとスティグマが形成されてきた。学校教育の現場でも、教員たちがアイヌ語の撲滅を目標として掲げるなど、日本化の推進とアイヌらしさへの抑圧が進められた。アイヌ民族の言語学者知里真志保の回想などから、このような状況下で1910年頃には言語の置換が進行していたと考えられる。

## 2.2 アイヌ語の復興と諸課題

1920年代からは、アイヌ自身がアイヌ語の筆録や執筆活動、研究活動に取り組むようになった。1980年代には、記録を残すことからアイヌ語を習得し維持しようという動きに変化した。ここでは、教材や教員の不足と、日本社会の変化が課題となっている。

### 2.2.1 研究の推進、学習環境の整備

アイヌ語には大きく3つの方言が存在する。アイヌ語の記録や研究は均等になされてきたわけではなく、これまでの研究は北海道南部の方言に大きく偏っている。近年では、地域の要望に応じて方言別の教科書が編纂されるなど、方言による格差を意識した学習環境の整備が行われている。また、音声資料や映像資料をオンラインで参照できるアーカイブとして整備することも進められている。これにより、1次資料が参照しやすくなった方言もあれば、いまだに参照可能な資料がほとんどない方言もあり、課題は多い。指導者の不足も深刻である。

### 2.2.2 言語復興とトラウマ・スティグマの解消

アイヌ民族への抑圧を議論する際に、被差別体験が減少してきていると述べられることがある。しかし、これは正確な捉え方ではなく、日本国が民族的に均質だという認識が浸透してきたために、差別の対象となる他者が不可視化しており、差別が表面化していないと見るべきである。実際には、日本社会における排外主義やマイノリティへの蔑視・攻撃は軽減しておらず、それがアイヌにとってはアイデンティティを伏せること、ルーツを知らせないことによってアイデンティティ喪失につながっている。言語を使用することはカミングアウトと重なる行為であるから、このようなマイノリティへの敵対的な環境を解消しない限り、言語学習の支援が効果を得ることは難しいだろう。

### 2.2.3 日本社会の変革をせずに危機言語の支援はできない

アイヌ語を復興しようとする試みの中にも、「文字が存在しなかったため資料がない」「時代の流れにより使用されなくなった」といった、アイヌ語自体に衰退の原因があるとする偏見が見受けられる。また、アイヌ語復興の目的が主にマジョリティの利益として位置づけられており、アイヌ民族が学習主体であることや学習環境の整備が基本的権利の保障であるという視点が欠如している。

また、アイヌ語やアイヌ文化の復興と日本語を中心とした公的教育の構想との矛盾が議論されていない。日本語を日本社会における唯一の言語とみなす姿勢、そして日本社会が多様性を考慮しない姿勢を改めない限り、マイノリティへの抑圧は継続され、「多様性の尊重」や「共生」は形骸化するだろう。札幌市や平取町の交通機関、国立アイヌ民族博物館などでのアイヌ語使用の試みは始まっているが、これらは量的にも質的にも限定的なものであり、より広範な展開が求められる。その結果、アイヌ語やアイヌ民族に対する開かれた環境が日本社会に形成される可能性が高まるだろう。

### 3. ろう学校こそ日本手話を一私と日本手話、そしてろう文化— (富田望)

#### 3.1 「ろう学校なのに先生の手話がわからない」に潜む背景

「私はろう者を文化的、民族学的少数派だと考える」(木村, 2007)。2022年の日本手話を学ぶ権利に関する訴訟は、これまで視覚化されていなかった日本手話を母語とするろう者の苦しみを浮き彫りにするものである。日本では1920年からろう学校で口話教育が力を入れられ始め、その結果、ろう学校では「手話という言語」が禁止され、105年間にわたり「手話という言語」への評価が低いままである。まず、ろう学校では手話は日本語と同等に扱われず、コミュニケーションの手段として位置づけられている。日本手話が日本語と同様に扱われないこの問題は、社会言語学の観点だけでなく、インターセクショナリティ、人種、民族問題とも関連している (Burch & Kafer, 2010; Crenshaw, 1994; Law, 2010; Leigh, 2009; Lim, 2022; McCaskill, 2011; McGuire & Tokunaga, 2020)。

#### 3.2 ろう児はバイリンガル児、絡み合う様々な問題点

「日本手話はろう者の言語である」(木村, 2007)。ろう学校での言葉の発達に関する支援において、問題の一つは、ろう児が日本手話という言語が日本語とは異なる独自の文法を持つ言語であることを学ぶ機会がないということである。これは、アイヌ人がアイヌ語を学ぶ機会がなく学習機会が剥奪された問題と共通点がある。ろう学校はろう児に対し、家庭内での言語の使用を奨励しつつ、同時に社会・文化モデルから日本語も習得させるべき環境を提供すべきである (滝尾, 2016) という。このような環境の不在は、移民の子どもや外国人に対する日本語教育にも関連しており、問題も類似している (Wilkinson & Morford, 2020) と考えられる。

##### 3.2.1 ろう学校における日本手話の位置づけ

ろう学校に在籍する教員がすべて手話を習得しているわけではなく、手話の習得が全教員に義務づけられているわけでもない。また、手話を教科として設けることもない。このため、日本手話がろう児の第一言語であるにもかかわらず、日本手話の教育を受けていない教員が日本語を教える状況が生じている。その結果、日本手話を母語とするろう児が自身の言語を尊重しながら学ぶ環境が保証されていないのが現実である。特に早期教育では聴覚に依存した日本語の習得が推奨されており社会文化的なサポートが必要であるが、その提供が現時点で不足している状況である。

##### 3.2.2 聴覚障害児への教育における「ろう者」という言葉の消失

近年、日本における聴覚障害児の教育に際して、「ろう学校」という名称が徐々に使われなくなり、「特別支援教育」または単に「学校」という名称へと変化している。アメリカでは、「Deaf」という単語は、大文字の「Deaf」と小文字の「deaf」で異なる意味を持ち、大文字は文化的、言語的なろう者を、小文字は身体的特徴としてのろう者を指す (Padden & Humphries, 2016)。しかし、日本語には大文字と小文字の区別がないため、その微妙なニュアンスが失われる傾向にある。この状況は、多数派が考える「ろう者 (deaf)」と、少数派が考える「ろう者 (Deaf)」の間の乖離をさらに拡大する恐れがあると懸念される。

### 3.3 包括的なデフフッドを教育現場に

上記の議論からも明らかなように、現在のろう学校では日本手話を母語とするろう児や難聴児に対するバイリンガルろう教育が不足している。しかし、最近提唱されたパティ・ラッドのデフフッド(Deafhood)は、文化的小よび民族学的ろう者の観点だけでなく、包括的な意味でのろう者を提唱している(Ladd, 2003)。デフフッドは、聴覚の程度に関係なく、聴覚優位または音声言語優位の構造の中で非抑圧者としての立場を共有するろう者たちを指す。すべてのろう者は、聴覚優位や音声の日本語優位の社会で情報を得るために日常的に努力し、情報保障などの配慮を求め、精神的に疲労している点で共通している。ろう者たちは、聴力の程度にかかわらず、聴覚優位や音声の日本語優位の社会で人権侵害を受けやすい立場にある(Nakamura, 2006)。デフフッドだけでなくデフゲインの視点もあり、今後の包括的なろう教育に不可欠であると考えられる(Bauman & Murray, 2014)。松崎は、特権的なディスコースに晒され続けているろう児や難聴児の中には、そのディスコースに対抗する適切なアイデンティティを見出せず、自己肯定が難しくなる事例があることを指摘している(松崎, 2019)。

#### 3.3.1 社会・文化モデルからの支援を

日本人が国語の授業で日本語について学び、教養を深めるように、ろう児も手話という言語について学び、教養を深める環境が必要である(Wilkinson & Morford, 2020)。現在、ろう学校においてノーマライゼーションの理念が広まっており、手話は役に立たないとして声で話すべきだとする意見が存在している。これは聴覚優位・音声言語優位の人々に利益がある構造が存在することを示唆している(Eckert & Rowley, 2013)。また、手話は後で習得すれば良いという見方が一般的であるが、実際にはろう・難聴の乳児には早期から手話に触れる機会が必要である(Lillo-Martin et al., 2021)。しかし、一部の人々はこの点を無視し、音声日本語の言語習得を重視し、声と言葉の発達に固執している。特に早期教育においては、手話へのアプローチが不足しており、手話の言語発達やろう文化についての理解が不足している。また、それを教えることができる人材も少ないのが現状である。移民の子どもや外国人の教育に類似した問題が存在することを考慮すると、ろう児への教育も同様に、ろう文化に基づいた教育とろう者としてのアイデンティティを育む場所、すなわちデフフッドやデフゲインを取り入れたろう教育の実践が必要であると感じられる。

## 4. 否定されるアイデンティティ—「異」が排除されるメカニズムと公正な言語教育の役割— (オーリ リチャ)

### 4.1 問題の所在

#### 4.1.1 ビロッキングの概念

言語とアイデンティティは深く結びついており、ビロッキング・belonging (Yuval-Davis, 2011)「私はここに属している・属す」という概念は双方向性で、私自身が「私は○だ」と思うこと、そして社会が「あなたは○だ」とすること、その2つの矢印が一致して初めて人間は「属している」と感じる。しかし「異」への異常な執着の結果、その特別性に囚われてアイデンティティが否定されることもあ

る。ビロンギングは言語を通じて示すことが多いが、例えば、「ガイジン」、「国帰れ」といわれる人は当然ながら「自分の居場所」について考えさせられる。それはいわば、「私は○だ」というアイデンティティが否定され、「あなたは×だ」というように、「○との差異が強調される×」というアイデンティティが外から付与されたことによって起きる葛藤であるといえる。このように、言語とアイデンティティは、ビロンギングという概念を通して、深く結びついている。しかし、ビロンギングは、自然なものではなく、社会的に構築され、政治化されるものである。

#### 4.1.2 ビロンギングの政治

ビロンギングは自然化されて日常的な慣行の一部となっているが、それがなんらかの形で脅かされるときに、明確化され、形式的に構造化され、政治化される。言葉によって、人と人の間に境界線が作られ、「異」が際立つ者のアイデンティティが否定されることでビロンギングの意識が脅かされ、政治化されていく。言葉によって描かれる目に見えない境界線はだれによるもので、なぜ可能なのか。その背景には、我々が属している想像共同体である国家の存在があり、そのコミュニティに属する「○○人」の特別性に囚われてアイデンティティが否定されることがある。

#### 4.2 意味づけの実践としてのアイデンティティ

国家 (nation) という共同体は、その純粋性によってではなく、それが「想像される」仕方によって区別されると Anderson (2016) はいう。もっといえば、国家には「異」は元々存在しているのに、それを無視し、恣意的な純粋性を持つ「○○人」というアイデンティティを作り上げるといえる。そして、その枠に当てはまらない「異が際立つ他者」を○○人として想像できないとし、国家というコミュニティから「あなたは○ではなく×だ」とその人のアイデンティティを変えようとするところがある。想像の共同体である国家で共通認識されたルールでできあがる規律社会 (Foucault, 1979) やハビトゥス (Bourdieu, 1990) が象徴的権力としての作用を持つことから、共通認識がずれている場合、同様のハビトゥスではないことを「○○人」ではないとする理由づけにし、アイデンティティを否定する。これはジェンダーセオリーにおいて Butler (1990) の performativity の概念を参考にするとわかりやすい。Butler はこう説明する、“we enact who we are” 「我々は我々が何であるかを演じている」と。つまり、アイデンティティは意味づけの実践であり、ジェンダーアイデンティティは言語によって構築され、構成されるという。この考えは生まれながらに割り当てられた○○人というナショナルアイデンティティにも通用すると筆者は考える。

#### 4.3 公正な言語教育への期待

以上の議論をまとめると、「アイデンティティ」の否定やスティグマ化の根底にある「境界」はマジョリティ (例えば、日本人) の属性が基準となり、それが「差異」を生み出し、構造的な差別を引き起こしているといえる。この差別構造は、国民国家制度、民族意識、マジョリティがその多数性として依拠する概念に支えられており、マジョリティの権力の源泉となっている。しかし、これらの権力は、言説や言葉によって形成され、それを個々の人間が用いることで内在化された思想やイデオロギーであり、言語や言葉の使い方によって、この不公正な構造を変えることができる。また、もし国家が想像の共同体であり、アイデンティティは言語によって構築され構成される意味づけの実践と考えるな

ら、「〇〇人」とは何か、その狭義に疑問を投げかけることも可能であろう。

## 5. おわりに (福島青史)

「はじめに」で述べたように、本稿は3名のパネリストによる主張を記し、その主張が読者に記憶、思考、感情などを喚起することを意図している。「おわりに」として、パネルディスカッションに司会として参加した福島の意識に去来したものを記す。

まず意識されたのは、自身のマジョリティ性である。私は、自身を「日本に暮らす聴者の日本人」とアイデンティファイできる。この環境においては、「アイヌ/日本」という民族性、「ろう者/聴者」という身体能力、「外国人/日本人」という有/無徴性において、権力を持つ自身のマジョリティ性が強く意識された。もちろん、外国人と過ごす機会の多い日本語教育現場に身を置くものとして、「外国人/日本人」という属性による権力構造について無意識であったわけではない。しかし、アイヌ、ろう者については、知識が乏しかったこともあり、オーリ氏が論じた「境界」を無意識に生きていたことを恥じた。知ることがはじめの一步となる。ただ、知っていたとしても、差異の政治性に気づけるわけではない。その感度の不確かさを認識したことも、このパネルで得た自分の状態である。

北原氏は、アイヌの文化や言語が、日本の近代化と同化政策によって否定され、歪曲されたと述べた。近代的な国境線がアイヌの生活の場所や文化を分断し、その存在を抹消する一因となったのだ。私は、アイヌが生活する場所を地図上に見ながら、日本/ロシアという「境界」を頭に描いていた。そして、今でも強く「境界」を意識しなければ、国境の残像を消すことはできない。

富田氏はろう者の視点から、聴者であるマジョリティ社会における不公正や差別の状況、そして日本手話の重要性について述べた。ろうはシンポジウム全体のテーマであったが、基本的な歴史や状況を知らなかったことを恥じた。また、大会では実際にろう者と共に大会の運営を行ったため、初めてコミュニケーションをする機会もあった。この関わりによって、知識が経験化された。しかし、その後、日常生活においてろう者と関わる機会はない。聴者として生きる私の「日常」は、ろう者と隔てられている。「境界」は物理的な空間にも存在するのか。私には、まだそれが見えていない。

オーリ氏は、本パネルの理論的な枠組みを提供した。日本社会における「異なる人」とみなされた個人の語りを通じて、アイデンティティ形成における差異の政治性を明らかにした。そして、この政治性を支える権力が同時に世界を変える力になることを示し、言語教育の可能性の根拠とした。

富田氏がパネルディスカッションの場で語ったように、人間とは複数の属性を持つ個人であり、単一の属性によって「当事者」として語ることも暴力的である。パネリストや私も、その他の属性、例えば、性別、社会的地位、学歴、経済力などの観点から眼差せば、異なる存在となる。

では、「境界」が幾重にも重なり利害を織りなす社会において「公正」とは何だろうか。それはどのような状況を指し、どの範囲で、どのように実現できるのであろうか。権力の源泉となる言語を扱う領域である言語教育において、回答が求められている。

## 参考文献

### 【北原 モコットウナシ】

北原次郎太・モコットウナシ (2012) 「aynu itah eyaycaakasno: tani an=kii pe・tani orowano an=kii kun pe」『ことば

と社会』14, 276-304.

- 北原モコットウナシ・蓑島栄紀監修(2018)『アイヌ もっと知りたい!くらしや歴史』岩崎書店  
 佐藤知己・北原モコットウナシ・イヤスシリヤ(2022)『北海道キャンパスガイドマップ』のアイヌ語併記作業  
 について—翻訳と脱植民地化に関する議論をめぐって』『アイヌ・先住民研究』2, 75-101.  
 中川裕(1995)『アイヌ語をフィールドワークする』大修館書店  
 中川裕(2005)「アイヌ語の現在と未来—危機言語の維持と復興—」本多俊和・大村敬一・葛野浩昭(編)『文化人  
 類学研究—先住民の世界—』pp. 229-318. 放送大学教育振興会  
 社団法人北海道ウタリ協会(編)(1994)『アコロイタク AKORITAK アイヌ語テキスト1』

#### 【富田 望】

- 木村晴美(2007)『日本手話とろう文化—ろう者はストレンジャー』生活書院  
 高嶋由布子(2020)「危機言語としての日本手話」『国立国語研究所論集』18, 121-148.  
 滝尾陽太(2016)「聴覚障害児の親支援における文化言語モデルの重要性—モード選択に至るまでの親の経験にお  
 ける『ろう者との出会い』—」(修士論文)日本社会事業大学大学院  
 平岡春人(2022)「担任に『日本手話』が通じない—ろう学校の小3男児が北海道を提訴—」朝日新聞 Digital  
 2022年7月27日 [https://www.asahi.com/articles/ASQ7W6QLFQ7WIPE01Q.html?iref=pc\\_rellink\\_01](https://www.asahi.com/articles/ASQ7W6QLFQ7WIPE01Q.html?iref=pc_rellink_01) (2024年  
 2月17日参照)  
 北海道 News web. (2022, Jan 27). 「ろう学校児童“日本手話で学べず教育の権利侵害” 新たに提訴」. NHK.  
<https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20230127/7000054655.html> (2023年12月31日参照)  
 松崎丈(2019)「デフフッドを導入したろう教育の実践」note 2019年12月20日. [https://note.com/matsuzakijo/n/  
 nc71cc69f10b9](https://note.com/matsuzakijo/n/nc71cc69f10b9) (2024年2月17日参照)  
 Bauman, H-D. L., & Murray, J. J. (Eds.). (2014). *Deaf gain :Raising the stakes for human diversity*. University of  
 Minnesota Press.  
 Burch, S., & Kafer, A. (2010). *Deaf and disability studies: Interdisciplinary perspectives*. Gallaudet University Press.  
 Crenshaw, K. (1994). Demarginalizing the intersection of race and sex: A black feminist critique of antidiscrimination  
 doctrine, feminist theory, and antiracist politics. In A. M. Jaggar (Ed.), *Living with Contradictions* (1st ed., pp. 39–  
 52). Routledge. <https://doi.org/10.4324/9780429499142>  
 Eckert, R. C., & Rowley, A. J. (2013). Audism. *Humanity & Society*, 37(2), 101–130. [https://doi.org/10.1177/  
 0160597613481731](https://doi.org/10.1177/0160597613481731)  
 Hill, J. C. (2017). The importance of the sociohistorical context in sociolinguistics. *Sign Language Studies*, 18(1), 41–  
 57. <https://doi.org/10.1353/sls.2017.0020>  
 Bauman, H-D. L. (2020). Audism. *Encyclopædia Britannica Online*. Encyclopædia Britannica Inc.  
 Ladd, P. (2003). *Understanding Deaf culture: In search of Deafhood*. Multilingual Matters. (=2007, パディ・ラッド『ろ  
 う文化の歴史と展望』森壮也監訳 明石書店.)  
 Law, C. F. (2010). Identities of becoming: Interviewing asian deaf immigrants in America. [Doctoral dissertation,  
 University of California]. ProQuest LLC.  
 Leigh, I. W. (2009). Stigma, oppression, resilience, and deaf identities. *A lens on deaf identities*. Oxford University  
 Press. <https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780195320664.003.0006>  
 Lillo-Martin, D. C., Gale, E., & Chen Pichler, D. (2021). Family ASL: An early start to equitable education for deaf  
 children. *Topics in Early Childhood Special Education*, 43(2), 156–166. [https://doi.org/10.1177/  
 02711214211031307](https://doi.org/10.1177/02711214211031307)  
 Lim, A. (2022). Translanguaging practices of a multiethnic and multilingual deaf family in a raciolinguistic world and  
 beyond. *Languages*, 7(4), No.311. <https://doi.org/10.3390/languages7040311>  
 McCaskill, C., Lucas, C., Bayley, R., & Hill, J.C. (2011). *The hidden treasure of Black ASL:Its history and structure*.  
 Gallaudet University Press.  
 McGuire, J. M., & Tokunaga, T. (2020). Co-constructing belonging: ‘Voluntary separation’ in deaf and immigrant  
 education in Japan. *Japanese Studies*, 40(3), 291–311. <https://doi.org/10.1080/10371397.2020.1851177>  
 Nakamura, K. (2006). *Deaf in Japan: Signing and the politics of identity*. Cornell University Press.  
 Padden, C., & Humphries, T. (2005). *Inside Deaf culture*. Harvard University Press. (=2005, キャロル・パッデン, ト  
 ム・ハンフリーズ『「ろう文化」案内 新版』森壮也・森亜美訳 明石書店.)  
 Rodriguez, N. (2020). Not deaf enough: Can you hear discrimination? *Rutgers University Law Review*, 73(1), 225–263.  
 Wilkinson, E., & Morford, J. P. (2020). How bilingualism contributes to healthy development in deaf children: A public

health perspective. *Maternal and Child Health Journal*, 24(11), 1330-1338.  
<https://psycnet.apa.org/doi/10.1007/s10995-020-02976-6>

【オーリ リチャ】

Anderson, B. (2016). *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. (Revised ed.). VERSO.

Bourdieu, P. (1990). *The Logic of Practice*. Polity Press.

Butler, J. (1990). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. Routledge.

Foucault, M. (1979). *Discipline and punish: The birth of the prison*. Penguin Books.

Yuval-Davis, N. (2011). *The politics of belonging: Intersectional contestations*. Sage Publications.